



枇杷園句集

乾

金  
方  
集  
句  
集  
句  
集



仙會  
七日甲

士解先生以刀圭珠味藥亦宜  
翁之風至子元益無馬離身  
在城巾不常遊兵知實  
正法回愈皆自名南回米  
樹一松赤松樹骨攬比如西  
回松杞園殊而角一了

彈ス四弦ヲ如珠ノ後ハ盤ノ及ニ女ノ或  
稱ス琵琶ノ國ノ人ト少ク日ヲ錄ス焉ト  
黃鸝ノ亦ハ宿ル也ト東ノ回望ル山ノ月ト  
猿ノ山ノ新月ノ影ヲ升ル庭ノ樹ト  
先ニ生ル對シ曰ク是レ吾ノ煙ノ雲ト  
疾ク也ト美ク也ト貴ク也ト殊ニ其ノ存ト

下ニ故ニ志ヲ亦ハ以テ取ル多ク嘗テ極ル酒ト  
度ニ又ハ以テ而ハ山ノ嶽ノ而ハ得ル也ト先生ト  
之ノ聲ヲ亦ハ以テ之ト勝ル相ノ並ル矣ト  
此ノ集ノ則ハ字ノ的ノ桂ノ山ノ之ノ意ト而ハ  
字ノ深ク松ノ見ル不レ朝也也ト有レ集ト  
謂ク矣ト病ノ也ト願ス余ト先ニ生ト

浮年家久是心少題其  
 集白狀其行  
 文化甲子秋桂  
 其言井

枇杷園句集卷之一

春

年内立春

少々し年内は春の来ふるもさすは庭

歳旦

何古又もちくて春半のあしと云

元日子白

松をすこちのほけりぬや春のすめ

侘あししくさるそち解の十染

賀

少くはむや年くも年の義一き

若菜

老うはむか菜をひとのりひる

古のりふらふ

さくら花の響の子もを家梅の菜

菜

睦月宵此夕れ杉村空のふやを

ゆくに杉の生垣引をりぬみ半に

このも一き菜庵あむる月の西よと

いへる夕一きいしむやと菜人をあ

か半る也

世のすれに菜あらん月と梅

梅

月山を月白くあすあまのうめのを

花さかみちの梅をふぬ目さかみちを  
江の上や二入してまをる梅のまぬ  
白梅のたよりさかみちを中うち

筑州山鹿のさかみち秋枝氏  
求子齋しるすめをすや  
いふまを

約のい少しも香よ白ひちり梅の花  
きこあさり人のあさりうめを食

九岳亭

うめうやい藪の中まで掃ちきり

神楽よき

買之のうめのまふそくめの花  
梅うやうけちるも音月お

芭蕉公羽肖像開眼

眼毛 鼻毛 くらんをん

ひらう勢あへ

月前

かゝる半の影や北窓木のしめの花

暮雨菴法會

おのゝハいろを塗るの白ひり那

五十八山の麓六十八山の半後七の

山路大坂よゝあねやそろく

まゐるはくそまさをるせ

山よぬるまゝすきあるも梅の下待ひ

塔

ほろしし啼塔のききし峰の松

塔のにききのゆるゆるゆるのち

ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

山の小三度にはききの来り

きりきりきりきりきりきりきり

きりきりきり

塔のきりきりきりきりきりきり

夢の年清原の水志つりぬ  
とこてやら夢のあきぬを此月

栞

夢の栞にうき世の垢のちりり

伊勢よて

夢の栞のあめや小あひとら

夢の栞や暮て啼 猿 淀の犬

矢矧よて

夢の栞の東海さる百里の那

あ草

われよ句あしあの子こゆる 塘外

雲

水しあいのほくくゆをゆくんこ

古きものさきんあなりぬ 朝うんこ

初願

朝螺貝の初願よとりのあらな



春雪

春の雪ふるのさくらぬ枝もたし  
旅人よ雪のふもてもすぢのそ

志山

消のこるさるもあそこの子供

春の雪

大佛のあめをいよゆくするき

春風

明日もおんあはれも神よおん春の風  
たも風やむらあそこの捨うさ

春

師をいしこもいしこもいしこも  
ふらふらやほらこのあそこの

春月

春の月雛をきき身似きぬ  
春の月松よこるこもあそこの

糊丁ぬきもるうちく也其の月

元

とくやをさやの北新一跡  
起くよを見るやよの出来けり  
お来るを元と自らこそ目ざされ  
元といふは

そのゆゑに廣くさうていふこと

虎足菴

はくくを見ておれをぬる楊子

芭蕉堂新成矣

肖像安置しありて

蝶ももろぬやまけちりいぬのけ

贈吳丹

よといは少いこいこいよのやをのけ

宇治の山み

よといは少いこいこいよのやをのけ

句半ときき 芭蕉人のあつろふ

芳野行

甲子吃行た日ひりりしーをたろり  
たよりらるるまごころた山深く白雪  
峰にたすり 煙る谷を埋んでや  
まきさるる其雨ふも降出のおほつら  
たよさるるをふ入るるとくくは  
清みのとくくや笑申るをちりり

山をくさるはらく此あり菴のさ  
清水のやうをみるよとくくのさ  
んよひさのあうる 花神は清し  
芭蕉のあつろふ身は世よりや  
とのあひるるを思ひおるり  
まゝるるさけさねをさるる  
訪ひ来るも清の末をけうす  
おをしまるるに常住の月照るる

いしをみたりぬるし

世を捨つあつとく

山路が

山嵐山

さくら

松さくら一木置ちりあし山

の苑七百ものしくらさぬ嵯峨の者

ぬきとひ嵯峨の申さて

はしうねをさふとあしをさふ

木母寺

苑よ鉦いりある罪れほろからん

二年にののの見やうのかつらり

眉山の老見むやし豊宮崎の文庫

をさるるの山にほひさう山村をさる

うると神ふお入る山のやうそをゆさや

とさへおもむきぬ

老の木にあすれうき事さる菴が

帰路

ちぬのりいんくもする山路哉

あらの土ハ踏み出ちやよ

海よりちやとせしういゆく

ちよと女よああ内さいせも辛酉の

神宮う詣り

焼 盛の三子海のさくら

さくらさくら

玉登行

玉登のやうをみるに志つる風を辨せ

しきり淋しきを雨と守るる農

橋小唄し水の山石にむせふるにつれり

淋しうささんさく水を辨ハ一みして

用ハ百千にわちる百千にあそふ人程

多のしとせ守況や一よあそふ人をや

世あそむるより住よりさうのや住る人

るやあんなちいさな松の菴ふ文松の外  
見るものなくかこくた回し  
半る僧のありくもる糸を考るいり  
まる人よてぼらせまのようと回し  
貝半しものこよもものもいり  
やあしこの櫛をそこの店よ戻りけり  
二花のちいさきも采あし  
いしやあふんかかく中おけりぬ

いへいあれうしすよこいほら  
あふる僧のうをさしとあひるあそ  
いしよあろをし床しぬれ日を要だ  
かえれえり見るものを終くし  
小倉の山北をささきの木のる

こもちりんる

新夜やおほつらあふゆしあふ

と口をさいみんれこの僧のあふりぬ

茶のよろき者しき侍りてははし  
むられ半しよいしや  
いつとぬ

涅槃會

あれ石と見たりふみひの佛  
堂人のみして申すぬ涅槃像  
新買にゆくひとそへも親をん哉

茶花

茶の花よ大名くひる林廬の南

桂五亭

茶の花にそめよすめの柿云  
かくいひくれとも親すあそ  
させるりーまも見しす子雀ハ  
せんたふぬもの

茶の花に口さしそあまの侍雀  
梅は肥るや茶の花吸つぬもあし

蕨入

蕨入や小ささおあうちの

帰鳥

三夜二夜あう絶えのせよ入

西湖

いま一度空田よあよのる

態谷よて

るるよ入る社心谷世心塘のま

標

花中うとそれハ標ゆき標と

堂

あみこまけ—人形をこほり

几中

風中うけささお—おの柱式

蛙

浮—花やおのう—まを帰蛙

上



人もふえらひつもふしきり山あり

燕

乙多の農標ふもあらぬ小白うち  
空木はむ中を燕の姓来ひ

雉

かへとまきより啼しう燧の雉の季  
ほろくとハ花よ雉あゝ柏子哉  
つらつらとハ又あゝきとに哉

幻住 芙蓉よて

松中少の雉やうらうら芙蓉のあめ  
雛

ひなのかる花のうけもどこころぬ  
すめりも来るや雛の膳まつり

桃

伏又ふと日られて来るうらめあめ

以テ 久能山の麓よりの

び干し毛きりきりさゆくはるは

藤

藤のちねちうくもう那とあひふ

実半日此宋をの色ハある。し半日の  
宋を夫ふされも宋ハゆるいさよめく  
小愿のやあよともちひさる神のさか

ゆしちりし後世菩提の修り者  
宋をゆるに忠告をこころハは宋よむふ  
菴のちちに松の枝折ふるくふ半日  
の樂ハ主人もゆるしきふ登し宋  
竹堂に琴を弾て月をのそ友とす  
ゆふまのちちあるをへ

山藤の柳まきしけし住居は

題一らん

ぬるけりや 空の雲に 暮らるる 雲の宿  
父母のあつしを 休になくすめ  
羨しき 砂に小松のみとらむ  
月甚をおもひ 見れば 松の風  
花とりや さうても 竹をみるる

善光寺に 雲のいもいもさる人の

念佛のあつハ 風をぬくひもあひ  
半く一 石のあつに 見れば 老い  
ひと半にさうし 佛の手とらむ  
まゝあつてさくと 見申 松の宿  
雲の袖うちをらふ 雲のいもいもさる  
かひおもひ 群集一 なるそか  
あひ

朝ぬく 風掃かき 雲さる

暮春

あさくハきこしきゆく蔭の門  
ゆく春をあたれむ竹の目影

椿堂輯

枇杷園白集卷之三

夏

更夜

ふふふとハ父のまの着人更云

老慵

又云人のきりしきにおとるまぬ

卯のちぬ

卯のちぬもーらまゆゆら男ら

時る

羨しきあやうなるものなりとあは  
れしあす思ひ控ても月夜に  
むらるるいもく時をさるる  
住ししの櫓うららるるなり  
ゆたやまよゆらふにあり時る

山宣堂よみ

念佛を米かむやうにほとくたは

あふぬるよそ一たぬなりとあは  
大草はゆの風ぬらぬに  
月夜にありしきみよにほとくたは  
来るるよそ一たぬなりとあは  
例の瓢箪来て松下の影に  
ゆらちぬ

運よの誰をやらうたなりとあは

糸紫

牽けうやいしやとてさきさうらふ糸

糸紫殿よき

此庭前をつくる榊のつら糸紫

茂

うくやの庭にむすぶ糸

備

尾花の崎をゆはる糸

かへした様ゆくひよの糸

とてあゝあの上は望しき

花の堂をたはる糸

こそけいこの佛さくしあまの糸

行子 蛸手

まけのあやの子供あてにむすぶ糸

既さしたに竹の子ありふおよき

伊勢のまはきのあう踏らり蛸手

牡丹

とくくく牡丹つりとむ堀の内

蜀菜

ふ六代蜀菜作くる山あうち

苺子

白きしに窮屈とまきいふあうち

あ〜〜とまう又はあうちの免

苔花

苔と花ともや花はあふちあ

諫鼓鳥

余はあうちのあうち〜〜とあ

蚊帳

連日のおめあ

日せくるまのあ

麻きこし〜あ

餅ひろふやすめああしく蚊屋のあ

心算

宵のふるや大布原をゆく所

粽

此處やむうしふるのさし粽  
うねしまついらも習とくちまわ

五月雨

五月雨のいせふ陸まきさかた

萱津の里

さみそねりやめを屋の堀る信

栗手の表

ひしりあつ陸の白さと五月

竹酔日

半け植る日もひるあまの植る  
休るあまのまの植るうらまの

みあまの庭を人の住居もよく解く俗



ありし心ふいにし人のことの後事を  
きりきりて俄に小さき杖を極くぬき  
におもひつらふんといふ事ありは  
半しけし急に舟をいふ事ありは

まき山

あしあふむるこていふゆくまき山

まき山

うゑてまき山田を極くぬき

いせ吉兵衛う茶店あまふ

田を極くぬきともういふぬいさくら

松のふき

雨きの垣鼻ゆけいさくら田うま

水雞

さゆよへハハふき水雞の門

古井のさと雨く風く真下よて

あゆませし水雞の小田あふふき

紫陽花

はなゆきやうらぐさをとるの木の

つら

つらやうらぐさをとるの木の杖

船川

待たせもあくるさゆく船舟

金沢山の麓ふさ

静のかりし清き舟長き舟の灯の

短夜

みしおや家屋にぬる雪の露

夏月

木秦をそよばせたるなり夏の月

夏の月ぬきくしきもゆる

団扇

光琳

あまの晴

古園

清あ

焚る北笹の葉を敷く清あ

蟬

蛭の口搔き蟬あく木うけあ

蓮

夏詠ふる砂のうさよ草の花

暑

あつこ日や小庭のまゆふ通り

大躰のたしをあつこあつこ

きし峰

乃ちこ舟の横子たしぬきの峰

夕さち

夕さちやぬき火を豊の家のあ

納涼

あつこ北のふらふらと西のつゆ

みこぬきすき月のあつこ

檀溪

す〜きた人の来ぬるす菴うち

丙午此年六月未嘗にゆまぬ谷の  
ひまぐ雪をばと松原のおく花を  
孫〜まの四時のけ〜きひと〜と  
のこるものれ〜何そ別に仙境を  
尋すのむ

山〜ちあのみさよ未嘗のなをみ  
これ板

南板〜まのちや甚いろ此は

宇洋輯



仙方前  
七月甲